

Frankenstein の怪物が求める愛の形

野間 由梨花

はじめに

私たちは日常生活の中で名前を付けることによって、その存在を認識していると言えよう。例えば創世記においても、アダムが神の創造したものに名前を付ければそのものになり、世界が作られていくといった描写がある。このように、名付けることは私たち人間にとって非常に重要な行為である。一方で名付けることには責任の所在を明らかにしたり、所有していることを示したりする力もある。つまり、存在を明らかにし、社会に属していることを示すために、名前は必要不可欠な要素なのだ。『フランケンシュタイン』では愛が与えられないことを嘆く怪物の姿が描写され、怪物は常に愛を求めている。怪物の求める愛の形が与えられない理由は外見の醜さ故なのだろうか。むしろその原因は、怪物に名前がないことにあるのではないだろうか。

本研究では名前のない怪物の姿を、19世紀頃の女性作家の姿に重ねて読むことを試みた。女性が小説を執筆・出版することは歓迎されるものではなく、彼女たちの多くは名前を隠して出版することを余儀なくされた。1818年に出版された本作品も匿名での出版である。怪物が名前を持たないこと、フランケンシュタインが名付けないことに注目し、19世紀の女性作家の立場を相関的に分析する。出版することをタブー視されていた女性作家と怪物の求めた愛の形に、名付けることがどのように関わっているのかを探求する。

『フランケンシュタイン』における名前とは何か

怪物に名前がついていないこともあり、本作における名前に関する考察は多いとは言えない。怪物自身は名前が無いことを疑問視することはないが、常にその存在に疑問を呈する。これは名前の欠落によるものだろう。名前の欠落が、怪物が社会から疎外された見えない存在、認められていない存在という事実を浮き彫りにしているからだ。一方で注目したいのは、フランケンシュタインが名付けることに関して述べている場面である。

The untaught peasant beheld the elements around him, and was acquainted with their practical uses. The most learned philosopher knew little more. He had partially unveiled the face of Nature, but her immortal lineaments were still a wonder and a mystery. He might dissect, anatomise, and give names; but, not to speak of final cause, causes in their secondary and tertiary grades were utterly known to him. I had gazed upon the fortifications and impediments that seemed to keep human beings from entering the citadel of nature, and rashly and ignorantly I had repined. (*Frankenstein*, “Textual Variants” 195)

自然という莫大な存在を少しずつ明らかにしても多くの事柄がまだまだ曖昧であること、たとえ名付けたとしても本質は掴めないままであること、そして自然と人間との間には超えることができない隔りがあることに、フランケンシュタインは不満を抱えていることがわかる。興味深いのは名付けることに言及しているのはこの箇所のみで、当該箇所は1831年版に追加されたテキストであるということである。メアリーは1831年版の前書きにおいて、修正の大部分はその語りであり、物語の本質には手を入れていないとしている。しかし、名付けるという観点から物語を読むと、追加されたテキストにはメアリーの強い主張を読み取れるだろう。

名前を与えられなかった女性たち

フランケンシュタインが嘆く越えられない隔りとは何か。19世紀の女性作家たちが置かれていた状況に重ねてみると、やはり職業作家として女性が活動することが批判的にとらえられていたことが関係していると言えるだろう。越えられない隔りを男女間格差と読むと、1831年版に追加されたテキストが一層意義深くなる。著者であることを明示できないということは、著者としての存在は隠されたままになる。メアリーが“authorship”を主張するようになることから、名付けることで所在を明らかにすることに対しての強い意識が読み取れると言える (Wright 49)。一方で女性が作品の著者であることを公表することはリスクを伴った。フランケンシュタインが、怪物に名前を付けることなく社会に放出したように、女性作家らもまた、彼女たちの著書であることを示さず、責任の所在を明らかにしないことで偏見から逃れることができたとも言える。しかし、女性作家らは名前を公表することのリスクと、名前を公表できないジレンマとの間で揺れ動いていたのだろう。例えばメアリーが、作品はあくまでも自分の創作によるものだと主張していることからわかる。

At first I thought but of a few pages – of a short tale; but Shelley urged me to develop the idea at greater length. I certainly did not owe the suggestion of one incident, nor scarcely of one train of feeling, to my husband, and yet but for his incitement, it would never have taken the form in which it was presented to the world. From this declaration I must except the preface. As far as I can recollect, it was entirely written by him. (*Frankenstein*, “Introduction” 180)

名前と本質

批評家の言葉は作品の本質を捉えていると言えるのだろうか。『フランケンシュタイン』においても、著者の名前が示されていないことで、男性作家の作品であるという前提で作品を批評し、賛辞を贈るものも多く見られる。一方で女性作家の作品ではないかと主張する批評は、批判的な内容のものが多くある。著者の性別は、作品を評価する際の基準だったことがわかる。例えば *The British Critic* は、『フランケンシュタイン』には道徳的要素もなく一貫性も見受けられず、女性作家の作品であるから作品が不安定であると指摘する。したがって、作品の本質を守るために、女性作家の作品であることを隠す必要があったと言えるのだ。匿名やペンネームを用いることは作家の性別を奪い、偏見から逸脱するための手段だったのである。しかし、女性作家らはそうした社会規範に挑戦し、その姿は怪物の愛を求める姿に重なっていく。

怪物が求めた愛の形

怪物は愛の欠落を嘆き、愛の欠落が復讐心を駆り立てたことは明らかだ。そして怪物が求めた愛の形は物質的なものではなく、外見にとらわれることなく本質を捉え、正しく評価をしてもらうことであると言えよう。怪物の求める愛の形とそれが叶えられない姿は、女性の作品であるということによって批判的な批評を受けていた女性作家のジレンマと類似する。しかし、女性作家らはあえて名前を公表しなかったとも言える。では、フランケンシュタインが怪物に名前を付けなかったこととはどのような相関関係を眺めることができるだろうか。

ジャック・デリダは *Passions* (1993) において名付けることについて議論を展開しているが、その帰結点はテクストの自立である。つまり、名前を付けることは帰属先を示し、その責任の所在を明らかにする力があるように見えながら、実際そのものはそのものとして存在する権利があるので、名前の有無はそのものの存在とは切り離されるべきであるとデリダは主張する。したがって、怪物には自由に生きる権利が与えられており、そのものとしてまっとうに評価を受けるべきだったのである。しかし、怪物が求めた様々な愛の形は、醜い見た目によるものだ。やはり、女性作家の作品ということによって正当に評価されなかった姿と重ねることができよう。

女性であることを隠すために名前を公表せず、**authorship** を主張することもできなかったが、メアリーの主張は **authorship** の主張にとどまらない。デリダが著者の意図と作品の持つパワーは切り離されるべきであると主張したように、メアリーは物語中に存在する彼女の痕跡は読者には関係がないものとして作品を解釈してほしいと訴える。本質を見てほしいと訴えた怪物の姿は、名前や性別にとらわれることなく評価してほしいと願った女性作家の姿と呼応している。

おわりに

名前や名付けることが抱える諸問題は、同時に社会が抱える問題とも複雑に絡み合っていると見えよう。私たちは意識的かつ無意識的に、その名のもとに様々な事象を評価しているのだろう。フランケンシュタインの父親は、手紙も書かないということはそのほかのあらゆることをおろそかにしているということだと諷める。目の前に事だけに没頭するあまり、愛情を持つことすらおろそかにしてしまったフランケンシュタインは、最終的に彼自身の行いを後悔することになったのである。怪物の求めた愛の形は、見かけだけの判断からくる偏見を捨て、そのものの本質を捉えることができた時に、ようやく叶えられるものなのかもしれない。

引用・参考文献

“The British Critic.” *Romantic Circles*, Romantic Circles, 1 Mar. 1998, romantic-circles.org/reference/chronologies/mschronology/reviews/bcrev.html. Accessed 5 Sept. 2023.

Shelley, Mary. “Frankenstein; or, The Modern Prometheus.” *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Edited by Nora Crook, vol.1, Routledge, 2016.

---. “Mary Shelley’s Introduction to the 1831 Edition”. *Frankenstein; or, The Modern Prometheus*. Edited by Nora Crook, vol.1, Routledge, 2016, pp.175-181.

Wright, Angela. *Mary Shelley*. University of Wales Press. 2018.

デリダ, ジャック. 湯浅博雄 (訳) 『パッション』 未来社, 2001.